

第4回優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「RESET」

東京都 白百合学園高等学校 一年 土屋絵美



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞／銀の星賞

『RESET』

東京都 白百合学園高等学校一年 土屋 絵美

中学生になって三ヶ月経った頃、ミカは初めて期末試験というものを受けました。その一月半程前に受けた中間試験も初めてでしたが、ピリピリした雰囲気の中で受ける試験は小学生の時には経験しないものでした。

そして今日、その結果の一覧表を受け取ったのでした。放課後の夏の日差しの中、学校の裏の小高い丘の上にある。青々と葉が茂る桜の大木の根本に腰を下ろしたミカは、青空の彼方に浮かぶ羊雲を眺めながらため息をつきました。

「あーあ。」

点数表に目を落とすと、そこには信じたくないような数字が並んでいました。「何かの間違いならよかったのに。」

でも、何度見ても数字は変わりませんでした。

「あー。リセットしたい。」

誰に言うともなくそんな言葉が口をついて出ました。

「お嬢さん、本当にリセットしたいですか？」

足元からそんな声が聞こえて来ました。

「えっ、誰？どこ？」

「ここです。」

そう言う声が聞こえる方を覗き込んでみると、背の低い雑草が生い茂る地面に開いた小さな穴の中から、茶色っぽいもこもこしたものが顔を出しているのが目に入りました。

「モグラ？」

それは凶鑑やテレビで見るモグラにそっくりでした。

「失礼な。僕はモグラではありません。みんな僕をモグラだと間違えるんだから。」

「なんでモグラがしゃべっているの？」



ミカは叫んでしまいました。

「しつ。大きな声を出さないで。僕はお嬢さんの時間の案内者です。」

「時間の案内者？」

「そうです。この世の中には時の流れを遡れる能力を持った人間がほんの少しだけいて、一生のうちで何回かその能力を使うことが出来るのです。その案内をするのが僕の役目なのです。」

「じゃ、私にもその力があるというの？」

「そうです。こちらにある記録によりますと、ミカさんは人生の中で一回だけ、お好みの分だけ時の流れを遡れる事になっています。」

「それとモグラがどんな関係があるの？」

「だから！僕はモグラではありません。毛色がぜんぜん違うでしょ。」

そういわれたミカがよくその生き物を見てみると、毛の色が七色に輝いていました。それを見たミカは、半信半疑で尋ねてみました。

「本当にリセットできるの？」

「そうです。でも、一生で一回だけです。」

「だったらリセットしたいなあ。少なくとも中学校に入ってからの方は…。」
ミカはそう言いながら三か月分の中学生生活を思い出していました。

ミカの通う中学校は、ミカの出身した小学校の他に、別の二つの小学校の卒業生と一緒に出来ていました。ミカの通っていた小学校は小さいけれどまとまりのある、穏やかな学校でした。だから今でもミカは小学生時代が大好きでした。

ところが、中学校ではミカの小学校の卒業生が一番少なかったもので、クラスの中でミカの小学校からの同級生は肩身の狭い思いをしていました。おまけにミカの仲良しだった友達は別のクラスに行ってしまったって、最初の頃は友達が中々出来ずに苦労をしました。

今思い出しても不愉快だったのは五月になった頃起こった事件でした。

その日、美術部に入っていたミカは、コンクールに応募する交通安全ポスターの製作に時間がかかって、下校するのが遅くなってしまいました。美術室から慌てて教室に戻ると、他のみんなのカバンは見当たらず、ミカが最後



になってしまったようでした。それで何となく不安になったミカは自分のカバンを慌ててつかむと、走る様に教室を出て、ドアを音を立てて閉めながら昇降口へ行きました。

次の朝、ミカが登校すると教室はざわついていました。

「何かあったの?」

ミカは近くにいた同じ小学校からの同級生に尋ねました。

「何かじゃないわよ。あれ、ミカがやったんでしょ。見たっていう人がいるのよ。」

そういう同級生が指差した方を見ると、粉々に砕けたガラスの一輪挿しが床に散らばっていました。入学式の日担任の先生が持っていらつしやった、いつもは教卓にある綺麗な一輪挿しの残骸でした。傍にはしおれたピンクのバラが一輪落ちていました。

「何で私がやったの。誰か見てたの。」

「隣のクラスの男子。昨日夕方、ミカが、凄い音がした後教室から走って帰るのを見たって言ってるわよ。」

「凄い音って……。」

ミカは声が出せませんでした。

「ドアは凄い音を立てて閉めたけど、私じゃない……。」

息も出来ないくらい苦しくなって、涙だけがぼろぼろと頬を伝って、教室の床に落ちて行きました。

そんな時、隣の小学校の卒業生だったリサが教室に入ってきました。リサは学級委員をやっていて人望がありました。

「何があったの。」

「ミカが一輪挿しを割ったのよ。」

「そんな事で人を責めるもんじゃないわ。」

とリサが言いました。

「でも、昨日ミカはそれを放ったまま帰ってしまったのよ。」

「昨日?だったらミカじゃないわ。」

「えっ?」



「だって昨日ミカが廊下を走って帰るのを見た後、私が教室に入ったもの。そ

のときは未だ一輪挿しは割れていなかったし。あつ。私でもないわよ。」

「でも、隣の組の男子が凄い音がした後、ミカが走って行ったって……。」

「確かにミカは、ドアが壊れるんじゃないかと思うくらいの勢いで閉めて行ったわ。」

結局、一輪挿しを割った「犯人」は判明しませんでした。でもこの出来事があったって、ミカはリサと友達になりました。仲良しになってみると、リサは本当にいい人でした。公平で思い遣りがあつて、何で今までこの人と話をきちんとしなかったのだろうと後悔しました。そして、これからは是非、リサとは一生友人でいたい、ミカは思うのでした。

だから、リサとの関係だけはリセットされなくなかったミカは、「時間の案内者」に尋ねてみました。

「好きなところだけリセットできるの？」

「好きなところまで遡ってリセットできますが、部分的にリセットすることは出来ません。それにもしかしたらもつと望まない結果になるかも知れません。」

更にミカさんは一度しかリセットできませんから、後で後悔しても取り返しはつきません。ですから……。」

「分かった。いいわ。リセットする！」

「でも、ミカさん。よく考えて下さい。」

「よく考えたわ。このままこのテストの結果表を家に持って帰るくらいなら、どんなことがあつたってリセットした方がマシよ。」

リサとの関係については未練がありました。それよりテストの数字は深刻だと思いました。

「本当にいいんですか？」

「いいって言ってるでしょ！」

「本当かなあ。」



「本当だって！」

「…それでは約束して下さい。リセットされた事は誰にも言わない事を。もしその事を口にするると、ミカさんは時のエネルギーに潰されて、形さえ無くなってしまいます。」

「ハイ。約束します。」

「本当にいいですね？」

「ハイ。本当です。」

「なんか心配だなあ。でも、そう言われると僕には断る資格がありません。では、いつに戻りたいですか？」

「入学式の日です。」

「中学校のですね。本当に宜しいですか？」

「はい。」

「それでは僕の尻尾をつかんで離さないようにしてください。」

「えっ？」

「尻尾をつかんで離さないで。」

そう言うと、時間の案内者はくるっと振り返りました。そして地面の小さな穴からは、虹色に輝く尻尾が突き出していたので、ミカは反射的にそれを両手でつかんでしまいました。

尻尾をつかむと同時に、ミカは時間の案内者が顔を出していた小さな穴に引き込まれて、行きました。

「こんな小さな穴に入れる訳が無い！」

と思う間も無く、ミカはするっと入り込んだのでした。それから不思議な瞬間の連続でした。今まで目の当たりにしてきた光景が、逆回転で繰り広げられて行きました。それも、文字通り目が回るような速さで。

昨日、おととい、一週間前、一ヶ月前…：そうして一瞬目の前が桜色に染まった、と思った瞬間、世界が停止しました。

気がつくくと、あの桜の木の下にいました。ただ先程までとの違いは、あの青々とした葉が茂る桜の木ではなく、ピンクの花びらが舞う、満開の桜の木の下にいました。手元に視線を落とすと、持っているバッグの中から、



未だページをめくった跡が無い真新しい教科書が覗いていました。その中の一冊を引き出すと、「入学のしおり」と書かれたパンフレットがバッグから滑り出て、地面に散らばった桜の花びらの上に落ちました。

「入学式の日だ。」

それは入学式の帰りこの場所から見たのと同じ眺めでした。

「リセットしたんだ。」

ミカは先程までの汗ばむような暑さとは違い、身の引き締まるような空気の肌触りに、現実を起こった不思議なことを受け入れざるを得ないことを知らされました。

とにかく混乱していました。でも事実を確認するために、自分の家に向かって歩き出しました。歩く道々、季節が今、春であることを肌身にしみて感じました。家の玄関の脇には、チューリップが咲き残っていました。

玄関のチャイムを鳴らすと、

「お帰りなさい。」

という一足先に帰っていた母の声がして、程なく鍵が開く「カチャッ」という音がしました。扉を開けて家の中に入ると、うれしそうな母が、

「入学式が無事済んでよかったわね。ミカちゃんの担任も優しそうな先生でよかったじゃない。」

と、はしゃいだ様子で言いました。

それは三ヶ月前の光景と全く一緒でした。

「本当に、リセットしたんだ。」

次ぐ日からの激変の世界を想像したミカでしたが、現実の生活には目立った

変化はあまり起こりませんでした。だから、

「本当にリセットしたのかな？」

と思う事もありましたが、でも確実に違うところはありません。まず、リサと早々に話をして友達になれました。

勉強も前の世界より楽でした。当たり前前の事でしたが、二回目の勉強でしたから成績はよくなりました。テストの問題は以前と少しずつ違っていま



たから、抜群に出来るという訳ではありませんでしたが、少なくとも勉強が嫌いにならずには済みそうでした。

物足りないこともありました。

早々と友達になったリサでしたが、以前の世界での関係のような強い絆を感じるには至りませんでした。ミカは積極的に友情を深めようと努力をしたつもりでした。でもそうすればする程、微妙な食い違いを感じてしまうのでした。

「まっ、あの事件が起こっていないからね。仕方ないか。」

そう思いながらカレンダーに目をやると、その事件があった日が二日後に迫っていました。

「明日の夕方一輪挿しが割れて、あさって私が犯人扱いされるのかな。」

リセットしてからの一ヶ月間を見ると、あの事件が起こるのか起こらないのか、ミカには予測がつきませんでした。というのは、ここまでの出来事が、大筋では同じながら、細部では大分違っていたからでした。でもあれは事件でしたから、きつと起こる、とミカは感じていました。

その日、ミカはやはり美術部のポスター製作で帰りが遅くなりました。慌ててはいませんでしたでしたが急いで教室に戻り自分のカバンを手にして、リサの机を見てみました。リサのカバンは未だ残っていました。

「やはりリサの方が私より後で帰るんだ。」

そして、教卓の上の一輪挿しに目をやりました。そこにはピンクのバラがささったままで割れていない一輪挿しがありました。一瞬躊躇しましたが、わざと音を立てて扉を閉めながら教室を後にしました。昇降口へと小走りに走りながら、後ろからリサが見ているか、隣のクラスの男子が見ているか、振り返りたい衝動に何回も駆られました。でもそれをこらえて、昇降口をも後にしました。

もう少しで校庭の東端の校門を出る、というところで、ミカの足が止まりました。

「やっぱり、真犯人を見つけなくっちゃ。」

そう呟いたミカは、脇目も降らずに走って昇降口へ戻り、教室へと急ぎまし



た。

教室の扉の前に立った時、ミカはもう一度躊躇しましたが、勇気を奮って、深呼吸した後そつと、そして少しだけ、扉を開けました。今度は音を立てないように気をつけました。

その瞬間、薄暗くなった教室の、ミカの立っている扉から一メートル程離れた辺りの床に、小さな光が二つ光っているのが目に入りました。よく見るとその光の持ち主は、大きなネズミでした。ネズミが大嫌いなミカは、思わず声を立ててしまいました。

「ギャツ。」

驚いたのはネズミも同じようでした。その場でくるつと振り返ると矢のように走り出し、教卓の脚を上って、教卓の上になりました。そしてあの一輪挿しに体当たり後、向こう側の脚を伝って教室の片隅へ消えて行きました。体当たりされた一輪挿しは、教卓の上で倒れてころころと転がった後、床の上へと落ちていきました。スローモーションの様に破片が飛び散り、ガチャン、と音がしました。

「ネズミだったんだ。」

意外な犯人にミカは呆然としました。でもすぐに自分を取り戻しどうすればよいかを考えました。本当なら教室に入って一輪挿しの破片を片付ければ良いと思いましたが、あんなに大きなネズミが出た夕暮れの教室に一人で入る事は、ネズミ嫌いのミカには到底出来そうもありませんでした。

「明日犯人扱いされて、リサに助けてもらおうしかないか。」

ミカはそう呟きながら、とぼとぼ歩いて家路へと就いたのでした。

果たして、次の朝ミカが登校すると、見たことのある光景が展開されていました。

「なにかあったの？」

ミカは近くにいた同じ小学校からの同級生に尋ねました。

「何かじゃないわよ。あれ、ミカがやったんでしょ。見たっていう人がいるのよ。」

と言われたミカは、今度は少し余裕を持って、



「私じゃないわよ。何か証拠があつてそんなことを言ってるの？」
と言り返しました。

「だって、隣のクラスの男子が昨日夕方、ミカが、凄い音がした後教室から走って帰るのを見たって言ってるわよ。」

その時ちようどリサが教室に入ってくるのを目にしたミカは、ますます余裕を持って、

「私じゃないわよ。私が帰る時にリサは未だ帰っていなかったから、リサが一輪挿しが割れていなかったのを見ていけば、私は無実でしょう？」

と言いました。更におもむろにリサに向かって言いました。

「ね、リサ。昨日リサが帰るとき、一輪挿しは割れていなかったでしょう？」
「うん。」

意外なことに、リサは気が重そうに言いました。その気配にミカは違和感を覚えました。

「でも、私はミカより先に帰ったと思うから、私が帰った後のことは知らない。
ごめん。」

「だって私が帰る時、リサのカバンは未だ教室にあつたよ。」

「でも、ミカは一度東門まで行ってから教室に戻ったでしょう。私は南門のところまで信号待ちをしていて、振り返ったらミカが走って戻るのが見えただ。
だ。」

だからごめん。ミカが割ったとは思っていないけど、でも、証明もできない。そういうリサの目に、ミカは疑念の光が宿っているのを感じずにはいられませんでした。

息も出来ないくらい苦しくなって、涙だけがぽろぽろと頬を伝って教室の床に落ちて行きました。でも、今度は誰も助けてくれそうな人はいませんでした。

ミカは涙を拭こうともせず教室を飛び出し、桜の木のある裏山へと走って行きました。

「リセットなんかするんじゃないわ。」

そうつぶやきました。桜の木の下に座り込んで、顔を伏せて声を上げて泣き



ました。涙がぼろぼろと地面に落ちて行きました。

その時、涙の落ちて行く先を呆然と見ていたミカの目に、見覚えのある、七色の毛皮に覆われた顔が現れました。

「あろう、ミカさん。お久しぶりです。」

それは時間の使者でした。

「実は……。」

ミカと時間の使者は声をそろえて言いました。

「ミカさんからどうぞ。」

「時間の使者さん。リセットを取り消して。無理なのは分かっているけど何とかして。」

「実は……。僕もリセットの取り消しをお願いに来たんです。」

「えっ。」

「実は、ミカさんにはリセットの権利がなく、そのう、僕が名簿を見間違えて、リセットしてしまったんです。」

「ええっ。」

「僕は上司に叱られました。ですから、リセットする前の状態に、もう一度リセットさせて頂きたいのですが……。」

「是非そうして。」

「リセットはよくありませんでしたか？」

「ええ。やはり元の方が良かったわ。」

「そうでしたか。でも、それではお互いの利益が一致したということと、リセットはなかったことに致します。あの七月初めの状態に戻しますので、もう一度僕の尻尾をしっかりと掴んで下さい。」

と言うなり、時の使者はくるつと向きを変え、尻尾を突き出しました。ミカは夢中でその尻尾をつかみました。再び色々な光景が目の前を通り過ぎ、あの七月の空の元に戻りました。

「ああ、あの日だ。」

もう、ミカには何が現実か、分からなくなっていました。でも、自分の中にそれまでと違った、確信に近い感覚が芽生えていました。



「リセットできなくていいんだ。リセットできないから大切なんだ。」ミカは羊雲を見ながら涙の跡を拭こうともせず、そう思ったのでした。